愛知県立大学における精神保健の現状と課題(6)
—学部別データの検討—

中　藤　　淳

【目的】

愛知県立大学では、精神保健上さまざまな問題をもつ学生が増え、それにより休学・退学する事例が最近多く認められる。こうした学生には早期の対応が求められ、そのための学生相談を行っている。

筆者はこれまでに、随時相談で得られたデータから①『学生相談室が設置された1978年と比べると最近の相談件数は著しく増加し、とりわけ1999年から2001年の3年間の相談件数が急激に増加している』などの結果（中藤、2002）や、1995年から導入した健康調査カード（University Personality Inventory：UPI）による1年生（新入生）のデータから②『1995年から2004年までの10年間にわたる新入生の精神保健上の特徴としては、1995年から1998年までの4年間と1999年から2004年までの6年間との間に顕著な差のあることが判明した。すなわち、前者の新入生が「気分が明るく、おおむね体の調子はよい。しかし、時として人を傷つけるのではないかと気になる」を基調とし、「いつも活動的であり、よく他人に好かれる」と、自分を肯定的に受け止めているのに対し、後者の新入生は「首筋や肩がこり、気疲れする。しかも、気分に波がありすぎる」を基調とし、「人を傷つけるのではないかと気になり、ものごとに自信がもてない」と自分を否定的に受け止めている。また、後者では心理的な否定感はもとより、身体的な否定感が際立ってきている』などの結果を得た（中藤、2004）。

また、UPIによる在学生のデータから③『1995年から1998年までの4年間における1年生（新入生）の精神保健の傾向および特徴を指し示す項目は、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。そして、彼らの精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少す

る。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることを示唆している。他方、1999年から2004年までの6年間におけるそれは、変動が少なく、安定している」などの非常に興味深い結果を得た（中藤、2005）。

さらに、在学生データを性別の要因から分析し、④『前項②と③は、例外が一部認められるが、基本的には男女共に認められる」すなわち、性別による差異がないことを明らかにした（中藤、2006）。そして、⑤『男女に共通して見られる27）記憶力が低下している、と12）やる気が出てこない、そして一方のみに見られて比較的出現頻度が高い48）めまいや立ちくらみがする、28）根気が続かない、52）自分のやったことを、確かめずにはいられない、の5項目を取り上げて在学期間内推移を検討し、それぞれの項目で一定の傾向が認められる」などの結果を得た（中藤、2006）。前回は、⑤で検討した5項目のデータを分析し、それらがこれまでに得られた結果を補足するものであることを明らかにした（中藤、2007）。

以上の結果は、いずれも興味深く、特に②から③で分析したUPIのデータは、1995年1年生の354名からはじまり2005年1年生の653名まで11年間にわたって数多く、しかも各年度の学生もそれぞれ異なっている。従って、データの分布も多岐にわたり、そこに規則性があるなどとは予想できなかったが、結果はそれに反するものであった。

ところで、本学は、前身である修業年限3年の旧制女子専門学校（国文科・英文科）が1947年（昭和22年）に設置されて以来、学制改革などにともなって、1950年（昭和25年）に修業年限2年の県立女子短期大学（国文科・英文科）、1957年（昭和32年）には修業年限4年の愛知県立女子大学（文学部に国文学科・英文学科・児童福祉学科を設置）、更に1966年（昭和41年）からは男女共学の修業年限4年の愛知県立大学（文学部・外国語学部・外国語学部第二部）へと発展してきた。

1966年当初の国文学科・英文学科・児童教育学科・社会福祉学科の4学科からなる文学部、また英米学科・フランス学科からなる外国語学部（その後、1968年にスペイン学科を増設）及び英米学科・フランス学科からなる外国語学部第二部の三学部をもって発足した本学は、1998年（平成10年）に長久手町へ移転

し、国際化・情報化・少子高齢化による高度福祉社会・生涯学習社会といった社会の動きを踏まえ、情報科学部（情報システム学科・地域情報科学科）の新設、新学科の増設（文学部に日本文化学科、外国語学部にドイツ学科・中国学科）、大学院の創設、県立女子短期大学の廃止とそれにともなう4年制への移行、昼夜開講制の導入など、多くの変遷を経て現在に至っている。

このように、本学は現在文学部・外国語学部・情報科学部の3学部及び大学院国際文化研究科・大学院情報科学研究科の3学部2大学院から成り、高校を卒業したばかりの者から社会人特別選抜を経て入学した者や留学生など、多様な学生が在籍している。また、本学は学制改革による学部学科再編を経て上記の3学部2大学院となったが、2009年度より愛知県立看護大学と統合するとともに学部・学科・大学院の再編が行なわれ、外国語学部・日本文化学部・教育福祉学部・看護学部・情報科学部の5学部及び大学院国際文化研究科・大学院人間発達研究科・大学院看護学研究科・大学院情報科学研究科の4大学院となる予定である。

さて、学生が本学を選んだ理由としては、学費が安い、自宅から通学圏内である、などを、また教育研究内容・レベルが充実し、入学者が納得できる偏差値であること、も挙げている（大学案内2009）。つまり、地元中部圏の堅実な学生が高い専門教育や研究、実習などを、経済的に負担が少なく学べる大学という特徴を示している。

そして、実際に選んだ学科の満足度は、満足と回答した学生が46.8%、ほぼ満足が30.9%、どちらともいえないが15.8%、やや不満と不満を合わせて6.3%であり、しっかりとした目的意識を持った学生の通う大学であることをも示している。

学生にそうした一般的な特徴はあるものの、学部・大学院が異なれば、当然そこに所属する学生の傾向も異なり、筆者が分析・検討している精神保健の特徴にも相違が予想される。そこで、本論文では、これまでに得られた結果を学部別に検討することを目的とする。但し、UPIの導入は1995年からなので、それから現在の学部に至るまでの主に文学部・外国語学部及び1998年に設置された情報科学部を対象とする。従って、上述の沿革を踏まえ、たとえば県立女子短期大学は文学部、外国語学部第二部は外国語学部に含めるなどの操作を行った。

【方法】

UPIは精神保健に関する71項目とその他の２項目の計73項目から構成され、「最近１年位の間に、ときどき感じたり、経験したことのある」項目にチェックすることが求められる。本論文では、こうして得たUPIのデータから先に挙げた②から⑤で分析したUPIのデータ、すなわち、

1］ 1995年から1998年までの４年間における学生の精神保健上の基調を示唆する項目35）５）68）

2］ 1995年から1998年までの４年間における学生の精神保健上の特徴を示唆する項目20）50）

3］ 1999年から2004年までの６年間における学生の精神保健上の特徴を示唆する項目18）15）22）

4］これまでの結果を補足することが示唆される項目27）12）48）28）52）

以上の計13項目の学部別の在学期間内推移を検討する。

【結果および考察】

最初にUPIを実施した学部別の学生数を表１に示す。なお、1995年は残念ながら文学部・外国語学部毎にデータが保存されていないため両学部合わせた学生数である354名をそれぞれに載せた。また、同年はデータの一部を欠いているため、４］で検討する12）の欄は空白となる。

表1.　学部別の学生数

学生数	文				外国語				情報			
	1年生	2年生	3年生	4年生	1年生	2年生	3年生	4年生	1年生	2年生	3年生	4年生
1995	354	216	198	160	354	143	109	103				
1996	176	193	91	161	213	106	52	211				
1997	164	59	178	183	203	18	75	201				
1998	191	223	242	264	177	225	210	239	65	57	46	66
1999	253	233	225	289	253	219	203	283	75	59	73	90
2000	289	225	272	321	280	259	247	281	74	67	76	77
2001	269	256	267	317	250	243	212	283	70	66	72	73
2002	259	253	271	322	283	249	235	317	73	68	75	76
2003	290	279	283		272	242	190		76	64	72	
2004	277	260			267	230			74	64		

1] 1995年から1998年までの4年間における学生の精神保健上の基調を示唆する項目35) 5) 68) の学部別の在学期間内推移について

1995年から1998年までの4年間では、既に述べたように35) 気分が明るい、5) いつも体の調子がよい、68) 人を傷つけるのではないかと気になる、の3項目は1年生の大多数に意識もしくは自覚され、いずれも上位3位以内を占めた。また、1995年から1998年までの4年間における1年生の精神保健の傾向および特徴を指し示す項目は、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。そして、彼らの精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることを示唆した。

表2は項目5) 35) 68) の学部別の在学期間内推移である（項目番号順に示す：以下同様)。たとえば、項目5) の1998年の文学部1年生は上記191名の59%、すなわち113名が「自分はいつもからだの調子が良い」と意識もしくは自覚していることを示している。彼らが進学して2年生になると（223名の内）22%が、3年生になると（242名の内）14%が、4年生になると（264名の内）20%が、同様の意識もしくは自覚していることを示している。

表2より、文学部の1年生では項目5) 35) がいずれも50%以上の値であり、特に項目35) の1995年及び1998年では60%の極めて高い値を示している。項目68) では50%以上の値は、1998年のみだが、1999以降の値と比べると出現頻度の高いことが分かる。

外国語学部も同様で、特に項目35) では1995年、1996年及び1998年が60%以上の極めて高い値を示している。

情報科学部は1998年設置なのでそれ以前の3年間のデータはない。しかし、1998年の1年生では項目5) 35) の出現頻度はそれぞれ51%、48%であり、いずれの値も19%以下である1999年以降と比べて値の高いことは明らかである。

項目68) は38%と1999年以降と比較すると高い値だが、項目5) 35) ほど明瞭ではない。

まず、項目5) の学部別の在学期間内推移を図1に示す。図1より3学部と

表２．項目５）35）68）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目5)	文				外国				情報			
	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年
1995	54	48	52	58	54	49	53	66				
1996	57	51	66	27	49	56	62	23				
1997	52	46	34	17	54	50	8	13				
1998	59	22	14	20	59	23	14	25	51	12	17	18
1999	18	14	14	15	17	16	15	15	13	7	25	16
2000	15	14	10	8	19	12	9	11	11	12	7	14
2001	15	13	8	11	20	14	13	12	19	14	11	12
2002	14	9	7	6	16	16	7	16	16	4	4	12
2003	17	13	9		14	13	7		12	11	4	
2004	13	11			17	12			7	8		

項目35)	文				外国				情報			
	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年
1995	60	61	53	56	60	55	53	59				
1996	61	55	59	20	62	59	65	21				
1997	59	63	37	12	52	44	8	11				
1998	60	19	10	10	67	23	18	16	48	18	15	11
1999	17	15	13	9	24	10	7	12	13	8	10	16
2000	15	13	9	8	17	11	8	9	9	3	5	8
2001	13	10	8	9	19	12	9	12	16	14	7	15
2002	14	9	7	7	14	10	6	15	5	4	3	8
2003	16	10	11		15	11	8		4	8	1	
2004	13	10			13	10			5	8		

項目68)	文				外国				情報			
	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年	１年	２年	３年	４年
1995	44	34	31	23	44	32	27	19				
1996	37	36	21	12	43	39	29	11				
1997	45	29	22	13	39	28	13	9				
1998	50	17	7	5	45	14	9	5	38	18	13	3
1999	25	15	10	3	21	8	6	5	25	12	7	2
2000	28	18	11	9	18	10	6	4	14	15	4	12
2001	26	14	10	6	25	12	9	6	21	18	8	3
2002	25	16	10	8	23	12	5	5	26	10	7	1
2003	21	14	10		18	13	8		14	11	3	
2004	32	25			22	16			27	16		

もに1995年から1998年までの４年間と1999年から2004年までの６年間との間に顕著な差のあることが改めて確認できる。また、文学部・外国語学部ともに1995年は48%（文学部２年生）以上の値を在学期間中は維持し、1996年は３年生までは49%（外国語学部１年生）以上の値を示し、４年生になるとそれぞれ27%、23%へ、1997年は２年生まで46%（文学部２年生）以上の値を示し、３年生になるとそれぞれ34%、８%へ、1998年は１年生では両学部ともに59%だが２年生からそれぞれ22%、23%へと値が急減する点も確認できる。情報科学部も1998年は文学部・外国語学部同様に１年生で51%の値が２年生で12%へと

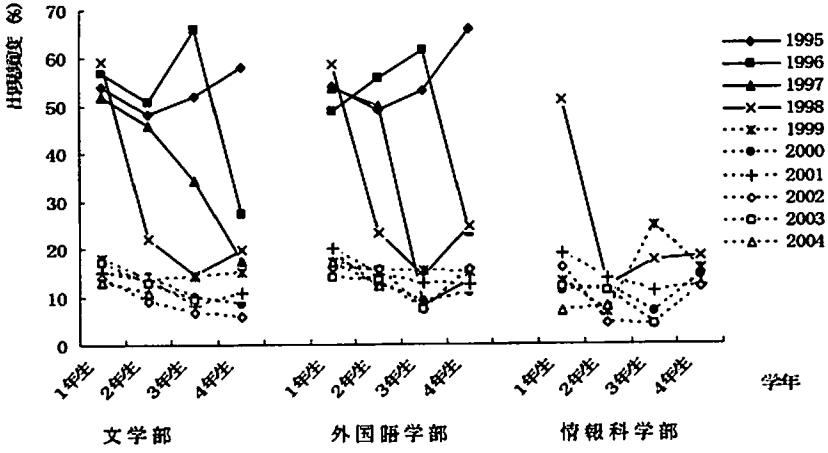

図1．項目5）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

急減する。

このように、3学部ともに在学期間内推移は、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。そして、彼らの精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることをも示している。

次に、項目35）の学部別の在学期間内推移を図2に示す。項目35）も3学部ともに1995年から1998年までの4年間と1999年から2004年までの6年間との間に顕著な差のあることが確認できる。また、文学部・外国語学部ともに1995年は53%（文学部3年生と外国語学部3年生）以上の値を在学期間中は維持し、1996年は3年生までは55%（文学部2年生）以上の値を示し、4年生になるとそれぞれ20%、21%へ、1997年は2年生まで44%（外国語学部2年生）以上の値を示し、3年生になるとそれぞれ37%、8%へ、1998年は1年生では60%、67%だが2年生からそれぞれ19%、23%へと値が急減する点も確認できる。情報科学部も1998年は文学部・外国語学部と同様に1年生は48%の値が3年生で12%へと急減する。

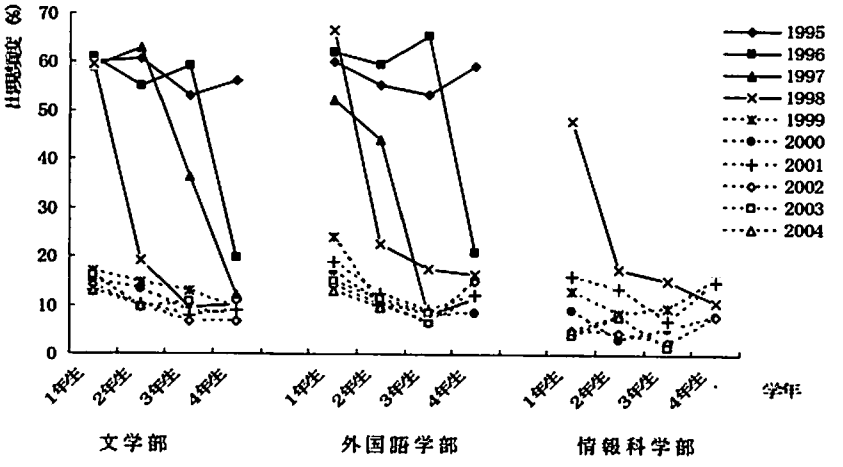

図2. 項目35）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

このように、項目35）でも３学部ともに在学期間内推移は、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの６年間の水準にまで減少することが判明した。そして、彼らの精神保健の傾向および特徴は、１年生から４年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることをも示している。

さらに、項目68）の学部別の在学期間内推移を図３に示す。項目68）では項目５）35）で明瞭に認められた規則性はさほどクリアではない。しかし、文学部・外国語学部ともに年度が進むに伴って、また学年が進むに伴って68）の出現頻度が減少する点では同様である。情報科学部も同様であるが、1995年から1997年までの３年間のデータを欠いていることも影響しているのだろうが、1999以降と近似したデータである。

このように、項目68）では、項目５）35）ほど明瞭ではないが、在学期間内推移は、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの６年間の水準にまで減少するといえよう。

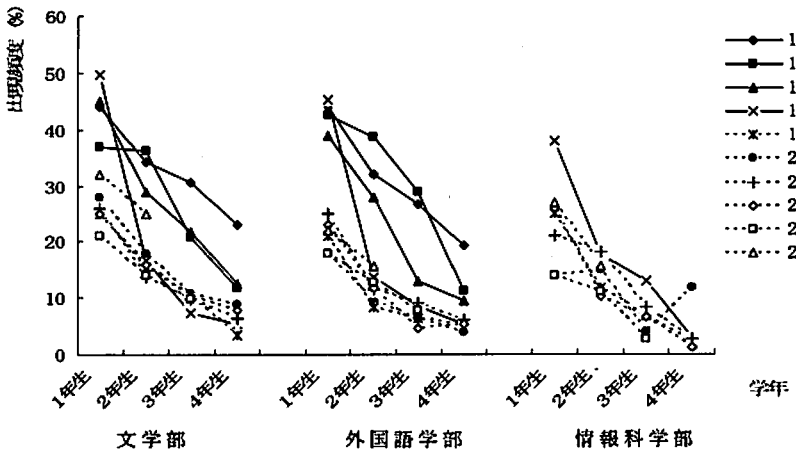

図3. 項目68）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

1］で検討した1995年から1998年までの4年間における学生の精神保健上の基調を示唆する項35）5）68）は、1999年から2004年までの6年間とは異なり、自分を肯定的に受け止めていると推測される。それらの在学期間内推移は、学部別のデータでも、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。すなわち、1995年から1998年までの4年間における1年生の精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることを示唆している。さらに、この特徴は学部には関係ない。すなわち本学学生全体に当てはまるといえよう。

2］ 1995年から1998年までの4年間における学生の精神保健上の特徴を示唆する項目20）50） の学部別の在学期間内推移について

精神保健上の基調に関しては1］で取り上げ、検討した。ここでは、.精神保健上の特徴を指し示す項目20）いつも活動的である、50）よく他人に好かれる、を取り上げてそれらの学部別の在学期間内推移を検討する。

表3は項目20）50）の学部別の在学期間内推移である。表3より、文学部の

表３．項目20）50）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目20)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	40	35	39	38	40	34	41	18				
1996	45	41	47	17	38	46	35	18				
1997	38	42	28	10	32	39	7	12				
1998	35	14	12	11	45	16	13	16	45	16	22	9
1999	13	13	12	10	14	7	9	13	12	5	14	14
2000	10	11	8	8	14	9	9	9	8	9	1	8
2001	9	7	5	7	14	7	9	13	10	12	3	12
2002	10	6	8	10	13	12	7	15	8	3	4	11
2003	11	9	10		17	13	12		7	8	3	
2004	10	9			13	10			7	3		

項目50)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	33	27	27	33	33	22	32	43				
1996	36	33	40	6	34	28	29	14				
1997	32	34	16	7	31	17	4	8				
1998	36	2	5	5	36	10	8	7	17	0	9	5
1999	6	5	5	3	9	3	3	5	8	0	1	2
2000	6	2	4	5	5	2	2	3	1	3	0	1
2001	3	5	1	4	5	2	2	7	3	5	4	4
2002	4	4	2	4	6	4	1	4	7	0	0	1
2003	3	2	2		4	2	3		0	2	0	
2004	6	4			3	5			1	5		

１年生では項目20）50）がいずれも30％以上の値であり、1999年以降は、項目20）が13％以下、項目50）も６％以下へと急減していることが分かる。

外国語学部も同様で、1995年から1998年までの４年間が30％以上の値なのに対し、1999年以降の６年間では項目20）が17％（2003年）以下、項目50）も９％（1999年）以下と、文学部と同様に1999年から急減していることが明瞭である。

情報科学部も（1998年設置なのでそれ以前の３年間のデータはないが）1998年の１年生では出現頻度が45％、17％であり、項目50）の値はやや低いが1999年以降の値と比較すると両項目ともに値の高いことは明らかである。

項目20）の学部別の在学期間内推移を図４に示す。図４より３学部ともに1995年から1998年までの４年間と1999年から2004年までの６年間との間に顕著な差のあることが改めて確認できる。また、文学部では、1995年は35％（２年生）以上の値を在学期間中は維持し、1996年は３年生までは41％（２年生）以上の値を示し、４年生になると17％に、1997年は２年生まで38％（１年生）以上の値を示し、３年生になると28％へ、1998年は１年生では35％だが２年生から14％へと急減する。外国語学部は1995年で従来の在学期間中は一貫して高い

値を維持する結果とは異なり、4年生で18%へと急減している。1996年以降は従来どおり3年生まで35%（3年生）以上の値が4年生で14%へ、1997年は2年生まで32%（1年生）以上の値が3年生になると7%へ、1998年は1年生では45%だが2年生から16%へ急減する。情報科学部も1998年は文学部・外国語学部同様に1年生で45%の値が2年生で16%へと急減する。

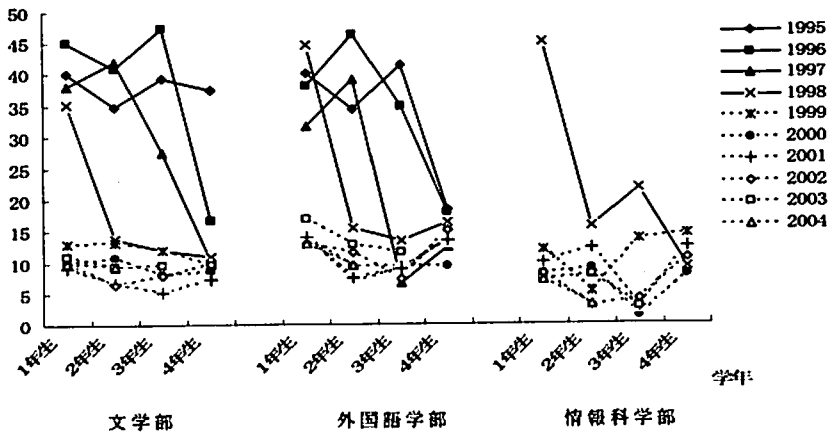

図4．項目20）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

このように、外国語学部の1995年が従来の規則性からは若干逸脱するが、3学部ともに在学期間内推移は、概ね一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。さらに、彼らの精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることをも示している。

次に、項目50）の学部別の在学期間内推移を図5に示す。項目50）では文学部・外国語学部ともに1995年から1998年までの4年間と1999年から2004年までの6年間との間に顕著な差のあることが確認できるが、情報科学部ではそれが明瞭ではない。

まず、文学部・外国語学部では1995年は22%（外国語学部2年生）以上の値

を在学期間中は維持し、1996年は３年生までは28%（外国語学部２年生）以上の値を示し、４年生になるとそれぞれ６%、14%へ、1997年は文学部では２年生まで32%（１年生）以上の値を示し、３年生になると16%へと半減する。外国語学部は、従来の傾向と若干異なり１年生の31%が２年生で17%へと減少し、さらに３年生で４%へと激減する。1998年は１年生では両学部とも36%だが２年生からそれぞれ２%、10%へと値が急減する点が確認できる。

他方、情報科学部では1998年は１年生が17%で、それ以外の年度及び学年ではいずれも一桁の値である。本論文でこれまで検討してきた各項目が示す「年度が進むに伴って出現頻度が減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になる」という規則性は明瞭ではない。

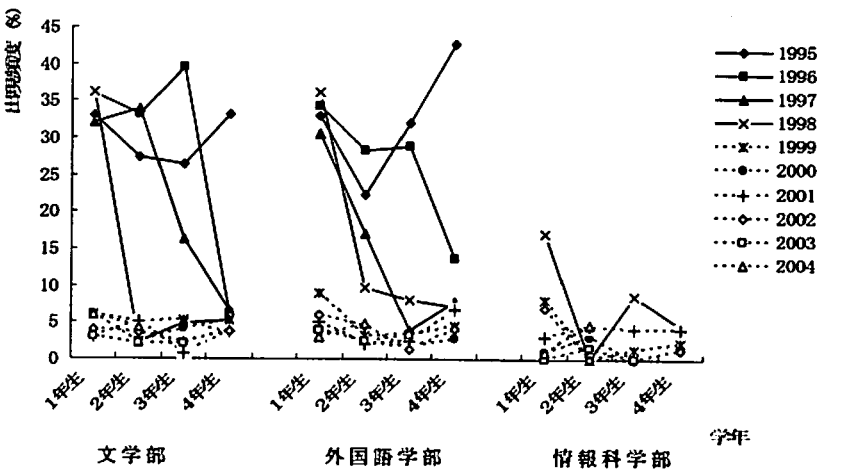

図５．項目50）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

このように、項目50）では文学部と外国語学部での在学期間内推移は、外国語学部で一部傾向の異なる点もあるが、概ね一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの６年間の水準にまで減少することが判明した。さらに、彼らの精神保健の傾向および特徴は、１年生から４年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることをも示しているといえよう。

他方、情報科学部は文学部と外国語学部とは傾向が異なり、そうした規則性は明確には認められない。

2］で検討した1995年から1998年までの4年間における学生の精神保健上の特徴を示唆する項目20）50）は、1999年から2004年までの6年間とは異なり、自分を「いつも活動的であり、よく他人に好かれる」と意識もしくは自覚していると推測される。それらの在学期間内推移は、項目50）に関する情報科学部のデータを除くと、一定の規則性を示しながら1999年から2004年までの6年間の水準にまで減少することが判明した。すなわち、1995年から1998年までの4年間における1年生の精神保健の傾向および特徴は、1年生から4年生まで一貫して維持されるのではなく、その程度は年度が進むに伴って減少する。また、学年が進むに伴ってそれが顕著になることを示唆している。

ただし、項目50）に関する情報科学部のデータは上記の結果を追認できなかった。既に述べたが、1998年1年生が17%の値を示し、それ以外は0から9%の極めて低い値であった。この結果の要因は不明であるが、少なくともこの点で文学部・外国語学部と情報科学部間で相違のあることが窺われる。

3］ 1999年から2004年までの6年間における学生の精神保健上の特徴を示唆する項目18）15）22）について

1999年から2004年までの6年間における1年生の精神保健上の基調を示唆する項目18）首筋や肩がこる、15）気分に波がありすぎる、22）気疲れする、はその6年間および2005年の全ての学年で上位10位以内に、しかも比較的上位に位置していた。すなわち、これら3項目はきわめて安定した位置にあり、ほとんど他の要因の影響を受けないことを示唆している。

そこで、これら3項目の学部別の在学期間内推移を取り上げて検討・考察を進める。表4は3項目の学部別の在学期間内推移である。

表4より、1999年以降の6年間での出現頻度は、15）では情報科学部の2001年（1年生と2年生）及び2002年（2年生と3年生）を除き、いずれも学年が進むに伴い値が減少していくことが分かる。22）も同様の傾向を示し、やはり情報科学部の2001年（1年生と2年生）及び2004年（1年生と2年生）を除

表４．項目18）15）22）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目15)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	34	37	33	22	34	36	34	18				
1996	32	21	20	14	38	25	23	17				
1997	32	31	22	19	34	22	25	20				
1998	33	18	17	12	28	24	18	17	35	23	15	8
1999	30	21	17	13	26	19	18	11	28	20	12	10
2000	27	25	22	14	25	21	17	13	24	19	13	16
2001	25	24	18	15	30	21	20	13	16	23	18	12
2002	27	25	16	13	29	22	16	13	22	16	19	11
2003	29	22	17		26	21	17		30	25	17	
2004	27	25			28	24			38	22		

項目18)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	41	42	40	43	41	34	39	35				
1996	34	32	36	35	39	44	50	38				
1997	40	51	42	43	35	33	55	40				
1998	42	37	40	35	42	34	29	28	46	26	26	26
1999	39	36	34	33	40	34	36	33	21	24	18	14
2000	37	36	35	31	40	38	34	34	27	18	28	18
2001	36	33	32	30	37	37	34	35	21	23	22	15
2002	38	37	31	33	37	32	30	32	23	19	19	16
2003	39	34	29		30	31	31		29	22	29	
2004	36	31			32	30			18	20		

き、いずれも学年が進むに伴い値が減少していくことが分かる。

他方、18）は学年が進んでも値に大きな変動はなく、文学部は29%（2003年）から39%（1999年と2003年）の間で推移する。外国語学部も同様で30%（2003年と2004年）から40%（1999年と2000年）の間で推移する。情報科学部では全体に値が低く、14%（1999年）から29%（2003年）の間で推移するが、やはり学年が進んでも値に大きな変動はない。

まず、項目15）の学部別の在学期間内推移を図６に示す。図６より、１］の項目35）５）68）および２］の項目20）が概ね年度が進むに伴って、また学年が進むに伴って、それぞれの出現頻度は大きく減少する、という規則性を示したのに対し、項目15）はそうした特徴は確認できず、各学部共に学年が進むに伴って徐々にその値は減少していく傾向が窺える。

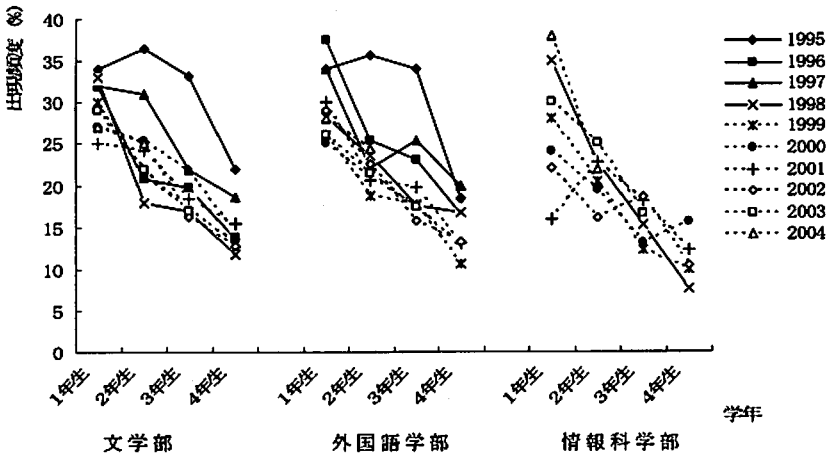

図6．項目15）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

次に、項目18）の学部別の在学期間内推移を図7に示す。

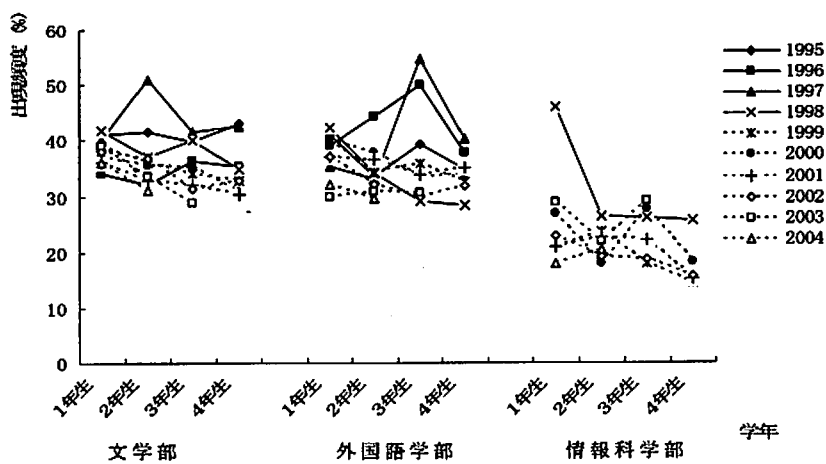

図7．項目18）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

図7より、項目18）の出現頻度は変動が少なく、各学部共に比較的安定していることが分かる。また前項と同様、文学部と外国語学部に比べると情報科学部の値が低い。ただし、前項とは異なり、学年が進むに伴い値が減少する点は認められない。

そして、項目22）の学部別の在学期間内推移を図８に示す。図８より、既に述べたが項目22）は項目20）同様、各学部共に学年が進むに伴って徐々にその値は減少していく傾向が窺える。ここでも文学部と外国語学部に比べると情報科学部の値は全体に低い点が確認できる。

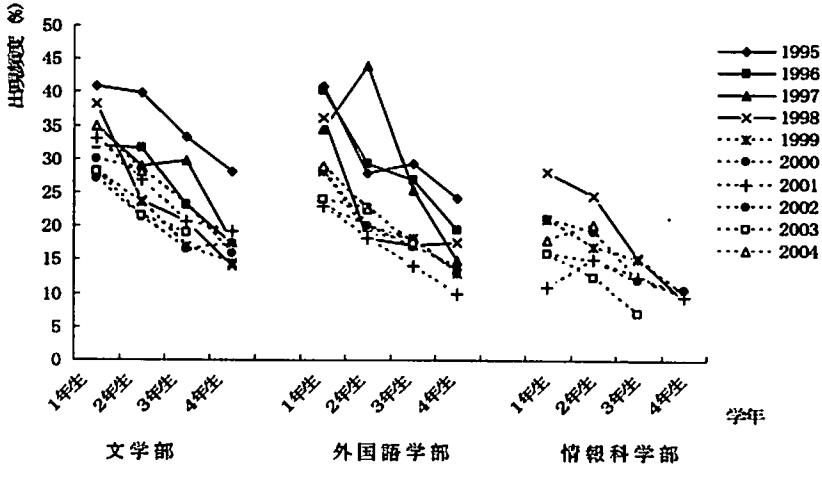

図８．項目22）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

3］で検討した項目18）15）22）は、1999年から2004年までの６年間における本学学生の精神保健上の基調であり「首筋や肩がこり、気疲れする。しかも、気分に波がありすぎる」と推測される。しかし、この基調はその６年間に限らず、それ以前の1995年から1998年の４年間においても認められ、在学期間内推移もほぼ同様の傾向を示すこと、しかも、その値は1995年から1998年の４年間の方が高いことも同時に判明している（中藤、2005）。すなわち、1995年から2004年、もしくは2005年までの10年以上にわたって、「首筋や肩がこり、気疲れする。しかも、気分に波がありすぎる」は本学学生の精神保健上の特徴であるともいえる。

その内、15）22）は学年が進むに伴って出現頻度は減少し、それは各学部で認められた。他方、18）はそうした傾向を示さない。すなわち、年度や学年にかかわらず各学部共に比較的安定していることが明らかとなった。

以上のように、各学部共に概ね同様の傾向を示し、3］で検討した結果も本学学生全体に当てはまることが確認できる。ただし、3項目ともに文学部と外国語学部に比べると情報科学部の値が低いことも同時に確認できる。

4］これまでの結果を補足することが示唆される項目27）12）28）48）52）について

27）記憶力が低下している、と12）やる気が出てこない、の2つの項目は、これまでに検討してきた項目35）5）68）のような1年生の大多数に意識もしくは自覚され、UPIの上位3位以内を占める、といったクリアな特徴を示しているわけではないが、男女共に認められて大学生の精神保健の現状と課題を補足することが判明している。

そこで、まず2つの項目の在学期間内推移を表5に示す。なお、1995年は残念ながらデータの一部が欠けていて、項目12もそれに当てはまるのでデータの

表5．項目27）12）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目27)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	31	37	34	33	31	34	30	25				
1996	26	28	26	21	30	25	23	24				
1997	27	24	31	26	28	17	29	18				
1998	32	23	18	16	28	21	21	18	34	18	28	17
1999	24	24	19	21	22	21	15	19	15	27	12	12
2000	23	28	26	18	23	21	27	21	22	12	13	10
2001	22	24	22	21	24	21	19	22	16	21	21	11
2002	27	28	23	20	23	22	19	16	16	10	12	12
2003	24	23	20		22	23	18		21	22	14	
2004	19	19			22	25			27	17		

項目12)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995		20	17	18		30	20	21				
1996	19	15	12	18	22	16	19	17				
1997	23	17	16	17	23	17	17	14				
1998	24	19	13	11	14	19	12	12	35	25	17	12
1999	17	17	12	13	17	15	15	14	25	25	18	11
2000	15	19	18	16	18	18	15	14	23	13	18	14
2001	17	20	15	16	19	17	15	15	13	27	11	11
2002	30	25	20	20	17	18	15	11	16	18	19	5
2003	21	24	17		24	20	17		22	28	22	
2004	24	24			20	22			32	22		

記載は行えなかった。

表５より、項目27）では、年度ごとの出現頻度の平均は1995年から1998年までは、文学部が34% 25% 27% 22%で平均は27%、外国語学部は30% 26% 23% 22%で平均は25.3%、情報科学部は1998年度のみ24%で、文学部と外国語学部はほぼ等しい値で、年度が進むに伴い値が減少する傾向にある。また、情報科学部も1998年のみだが、その値は文学部と外国語学部とほぼ同一である。

他方、1999年から2004年までは、文学部が22%24%22%25%22%19%で平均は22%、外国語学部が19%23%21%20%21%23%で平均は21%、情報科学部が17%14%17%13%19%22%で平均は17%で、各学部の６年間の平均はほぼ一定の値で推移し、概してそれ以前の４年間の値よりも低いことが分かる。また文学部と外国語学部に比べると情報科学部の値の低いことも確認できる。

項目27）の学部別の在学期間内推移を図９に示す。図９より、上記の諸点が一層明瞭になる。さらに、学部別の相違がほとんどないことも窺える。

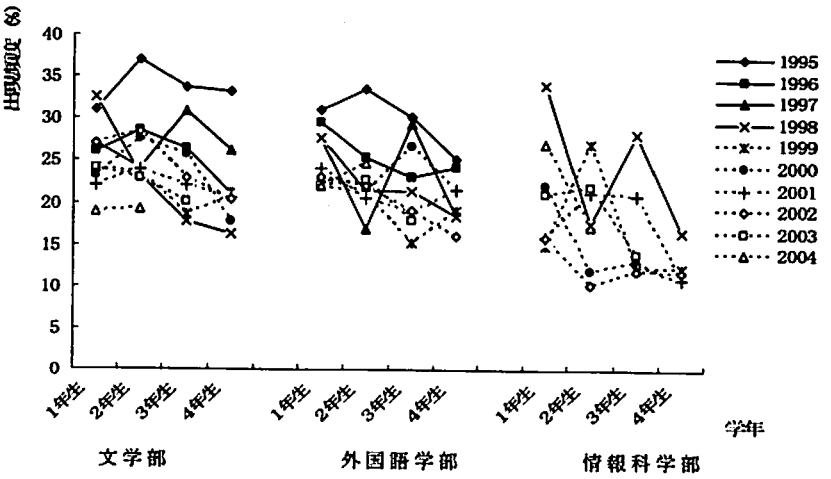

図9. 項目27）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目12）では、年度ごとの出現頻度の平均は1995年から1998年までは、文学部が18%16%18%17%で平均は17.3%、外国語学部は24%19%18%14%で平均は19%、情報科学部は1998年度のみ22%で、文学部と外国語学部はほぼ等しい

値で推移することが窺われる。また、情報科学部は1998年のみだが、その値は文学部と外国語学部より若干高い値である。

他方、1999年から2004年までは、文学部が15%17%17%24%20%24%で平均は20%、外国語学部が15%16%17%15%20%21%で平均は17%、情報科学部が20%17%16%14%24%27%で平均は20%で、6年間の平均は文学部と外国語学部では学年が進むに伴い値が若干減少する傾向も示している。情報科学部は学生数が少ないためか文学部と外国語学部と比べるとデータの変動が大きいが、やはり学年が進むに伴い値が減少する傾向を示している。なお、それ以前の4年間と比べてもあまり差のないことも分かる。

項目12）の学部別の在学期間内推移を図10に示す。図10より、上記の諸点が一層明瞭になる。ここでも学部別の相違がほとんどないことが窺える。

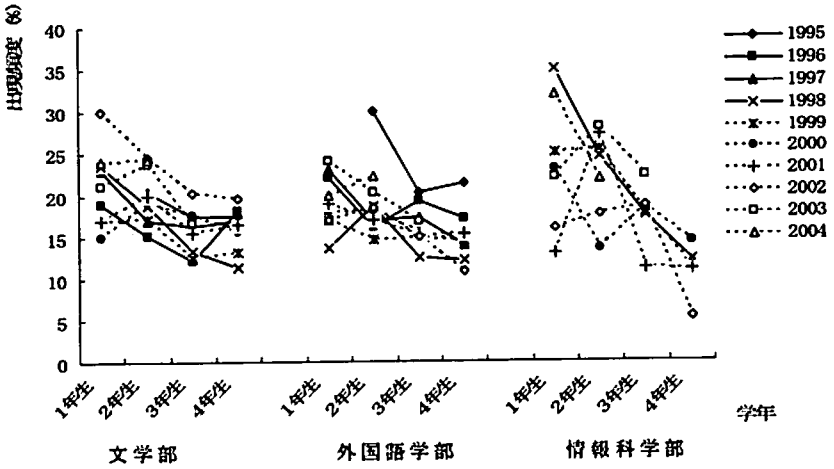

図10. 項目12）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

次に、項目27）12）と同様、大学生の精神保健の現状と課題を補足することが判明している項目28）根気が続かない、項目48）めまいや立ちくらみがする、52）自分のやったことを、確かめずにはいられない、の3項目は男子学生もしくは女子学生の一方に顕著に認められる。まず、3つの項目の在学期間内推移を表6に示す。

表６．項目28）48）52）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

項目28)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	38	31	28	24	38	35	36	27				
1996	29	30	23	16	41	25	21	19				
1997	32	22	17	15	35	22	24	21				
1998	31	19	13	8	34	21	14	8	32	23	11	3
1999	21	15	11	8	20	21	11	10	20	17	12	9
2000	21	17	15	12	22	18	15	11	15	12	12	5
2001	24	21	20	13	20	17	15	11	19	17	10	5
2002	27	20	15	16	18	19	15	11	23	18	16	9
2003	21	19	15		21	18	16		25	16	8	
2004	18	22			23	20			24	14		

項目48)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	27	27	24	25	27	17	15	19				
1996	23	25	21	19	30	25	19	14				
1997	29	24	24	16	27	17	16	17				
1998	37	20	17	10	27	19	16	10	29	12	11	5
1999	26	20	16	10	22	14	14	11	23	10	8	10
2000	22	24	18	13	24	20	13	9	19	10	5	3
2001	27	23	15	12	31	16	14	13	21	18	7	7
2002	27	21	11	13	25	16	12	11	19	9	9	5
2003	26	15	13		25	15	16		14	8	6	
2004	30	17			24	14			20	5		

項目52)	文				外国				情報			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
1995	36	26	20	21	36	25	33	21				
1996	24	27	22	8	32	28	19	10				
1997	35	39	21	14	27	28	7	7				
1998	36	15	11	8	29	11	7	9	32	21	15	5
1999	14	9	6	6	16	9	7	6	17	10	7	6
2000	18	10	6	7	15	10	7	5	27	6	17	9
2001	17	14	11	9	14	12	9	5	20	18	15	10
2002	17	12	7	7	14	10	6	6	18	16	7	7
2003	15	9	6		13	13	9		25	14	7	
2004	17	12			16	8			28	16		

表６より、項目28）では、年度ごとの出現頻度の平均は1995年から1998年までは、文学部が30%24%22%18%で平均は23.5%、外国語学部は34%26%26%20%で平均は26.5%、情報科学部は1998年度のみ17%で、文学部と外国語学部はほぼ等しい値で推移し、年度が進むに伴い値が減少する傾向が窺われる。また、情報科学部は1998年のみだが、その値は文学部と外国語学部より低い値である。

他方、1999年から2004年までは、文学部が14%16%20%19%18%20%で平均は17.9%、外国学部が16%17%16%16%18%21%で平均は17.2%、情報科学部

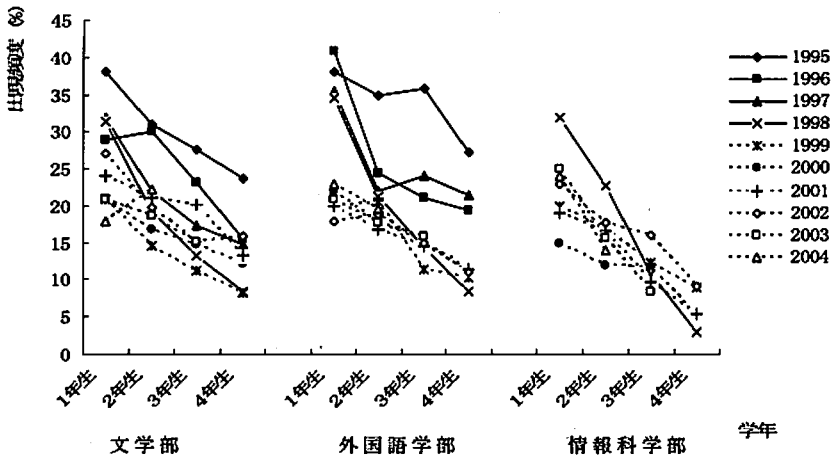

図11. 項目28）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

が15%11%13%16%16%19%で平均は15%で、年度が進んでもほぼ一定の値で推移することが分かる。6年間の平均は文学部と外国語学部では学年が進むに伴い値が若干減少する傾向も示している。なお、それ以前の4年間と比べると特に外国語学部でそれぞれの平均値が26.5%から17.2%へと大きく減少している点が目立つ。

項目28）の学部別の在学期間内推移を図11に示す。図11より、上記の諸点が一層明瞭になる。ここでも学部別の相違がほとんどないことが窺える。

項目48）では、年度ごとの出現頻度の平均は1995年から1998年までは、文学部が26%22%23%21%で平均は23%、外国語学部は19%22%19%18%で平均は19.5%、情報科学部は1998年度のみ14.2%で、文学部が外国語学部より高い値を示している。また、年度が進むに伴い値が減少する傾向は明瞭ではない。なお、情報科学部は1998年のみだが、その値は文学部と外国語学部より低い値であるのは従来どおりである。

他方、1999年から2004年までは、文学部が18%19%19%18%18%24%で平均は19.4%、外国学部が15%17%19%16%19%19%で平均は17.4%、情報科学部が13%9%13%11%9%12%で平均は11.2%で、年度が進んでもほぼ一定の値

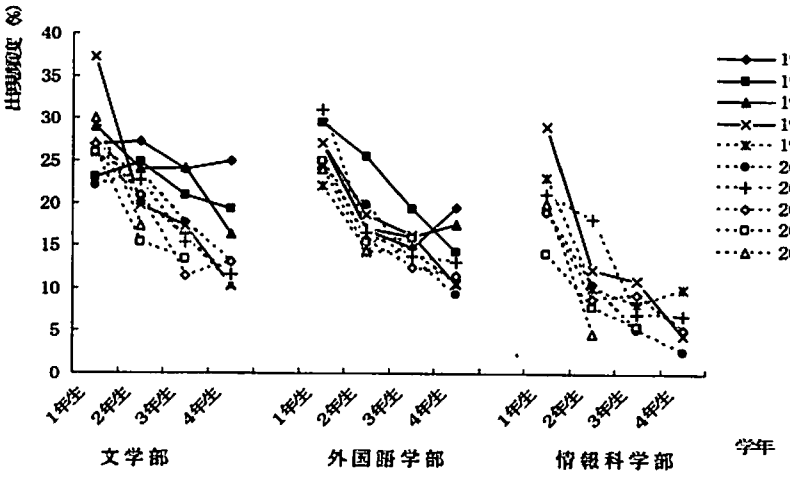

図12. 項目48）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

で推移することが分かる。また、文学部と外国語学部では学年が進むに伴い値が若干減少する傾向も示している。なお、それ以前の４年間と比べると各学部で値が減少している。

項目48）の学部別の在学期間内推移を図12に示す。図12より、上記の諸点が一層明瞭になる。ここでも学部別の相違はほとんどないことが窺える。

項目52）では、年度ごとの出現頻度の平均は1995年から1998年までは、文学部が26%20%27%17%で平均は22.5%、外国語学部は29%22%17%14%で平均は20.5%、情報科学部は1998年度のみ18.2%で、文学部と外国語学部がほぼ同じ値である。また、年度が進むに伴い値が減少する傾向は明瞭ではない。そして、情報科学部は1998年のみだが、その値は文学部と外国語学部より低い値であるのは従来どおりである。

他方、1999年から2004年までは、文学部が９%10%13%11%10%14%で平均は11.1%、外国学部が９%９%10%９%12%12%で平均は10.3%、情報科学部が10%15%16%12%15%22%で平均は14.9%で、これまでとは異なり、文学部と外国語学部よりも値が高い。各学部ともに年度が進んでもほぼ一定の値で推移することが分かる。また、各学部とも学年が進むに伴い値が減少する傾向も

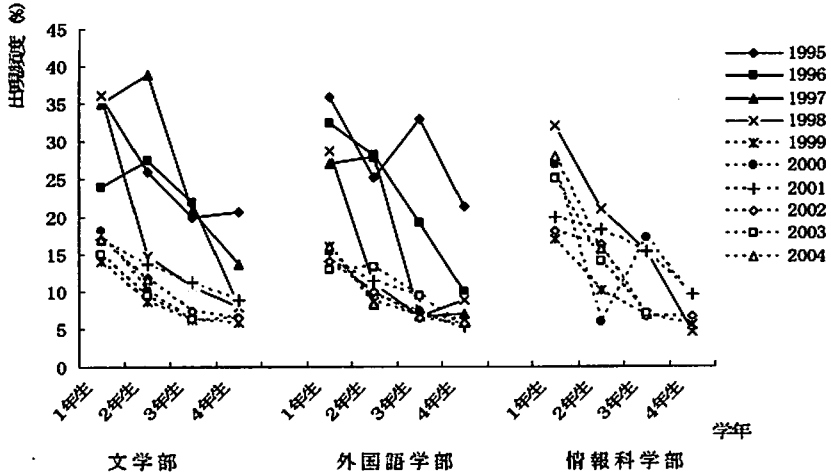

図13. 項目52）の学部別の在学期間内推移（出現頻度）

示している。なお、それ以前の4年間と比べると各学部で値が減少し、文学部と外国語学部では値が半減している点が顕著である。

項目52）の学部別の在学期間内推移を図13に示す。図13より、上記の諸点が一層明瞭になる。ここでも学部別の相違がほとんどないことが窺える。

以上で見てきたように、筆者が分析・検討している精神保健の特徴は、学部別では2］で検討した項目50）に関する情報科学部のデータなどに若干の相違が認められるものの、概ね学部別では同様の傾向を示すといえよう。

付記：本研究を進めるにあたって、本学保健師の松井恵子専門員、小川百合子専門員、林里枝専門員、そして下岸誠子専門員には資料の閲覧、助言などについて大変お世話になりました。記して深謝致します。

文　献

1）　中藤淳；2002　愛知県立大学における精神保健の現状と課題(1)　－学生相談の資料を中心に－．愛知県立大学文学部論集、第51号、pp. 1-14.

2）　中藤淳；2004　愛知県立大学における精神保健の現状と課題(2)　－健康調査カード

（UPI）による新入生のデーター．　愛知県立大学文学部論集、第53号、pp. 129-148.
3）　中藤淳；2005　愛知県立大学における精神保健の現状と課題(3)　－健康調査カード（UPI）による在学生のデーター．　愛知県立大学文学部論集、第54号、pp. 77-98.
4）　中藤淳；2006　愛知県立大学における精神保健の現状と課題(4)　－性別による健康調査カード（UPI）データの分析－．　愛知県立大学文学部論集、第55号、pp. 89-112.
5）　中藤淳；2007　愛知県立大学における精神保健の現状と課題(5)　－これまでの結果を補足することが示唆されるデータの分析－．　愛知県立大学文学部論集、第56号、pp. 101-117
6）　CAMPUS　GUIDE　愛知県立大学　大学案内2009. pp. 47-48.